The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	動詞述語における語種と形態的複雑性 ： 「～する」「～中」「～済み」に前接する語を中心に
Author(s)	今井, 忍
Citation	日本語・日本文化. 2024, 51, p. 17-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95212
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究論文〉

動詞述語における語種と形態的複雑性

―「～する」「～中」「～済み」に前接する語を中心に―

今井　忍

1. はじめに

本稿は、「～する」に前接する語について、その語種（和語／漢語／外来語）と形態的複雑性（一形態素／二形態素／・・・）の関係について考察する。「～する」に前接する語については多くの研究がなされているが（影山 1993、小林 2004、など）、語種がどのように関わるかについてはそれほど注目されていない。しかし、「～する」の前接要素は語種に関して一定のパターンを示す。

(1) a. *合わせする、*入れする、*続きする、*当てする
　b. 打ち合わせする、借り入れする、手続きする、手当てする
　c. *売する、*入する、*告する、*認する
　d. 発売する、導入する、報告する、承認する
　e. チェックする、オーダーする、テストする、セットする

(1) において、それぞれ a は一形態素の和語、b は二形態素からなる和語複合語、c は一形態素 [1] の漢語、d は二形態素の漢語、e は一形態素の外来語である。「～する」に前接する語としては、外来語だけが一形態素であることが容認され、和語と漢語については一形態素の語は容認されない。

同様のパターンは「～する」以外にも「～中」「～済み」に前接する要素についても見られる。

(2) a. *合わせ中、*入れ中、*続き中、*当て中
b. 打ち合わせ中、借り入れ中、手続き中、手当て中
c. *売中、*入中、*告中、*認中
d. 発売中、導入中、報告中、承認中
e. チェック中、オーダー中、テスト中、セット中

(3) a. *合わせ済み、*入れ済み、*続き済み、*当て済み
b. 打ち合わせ済み、借り入れ済み、手続き済み、手当て済み
c. *売済み、*入済み、*告済み、*認済み
d. 発売済み、導入済み、報告済み、承認済み
e. チェック済み、オーダー済み、テスト済み、セット済み

確かに、一形態素の漢語として「属する、愛する、察する、達する」といった語は存在するが、これらの要素は「～中」「～済み」には前接しない（この点については 4 節で議論する）。

(4) a. *属中、*愛中、*察中、*達中
b. *属済み、*愛済み、*察済み、*達済み

したがって、「～する」だけでなく「～中」「～済み」に前接する語は基本的に、外来語だけが一形態素であることが容認され、和語と漢語については一形態素の語は容認されないという特徴をもつと言える。

では、なぜ語種と形態的複雑性の両方がこの現象に関与するのだろうか。本稿では、これが語彙の借用という過程の特性によるものであることを論じる。

2 節では、日本語の形容動詞に前接する語について Nishiyama (1999) が示した一般化を概観する。Nishiyama (1999) の一般化は、本稿で示す特徴と一致しており、語種と形態的複雑性が「～する」「～中」「～済み」だけでなく「～な」についても関与していることを示している。3 節では、上で見た特徴を現代日本語コーパスにおける実際の用例を基に検証する。4 節では、語の借用と複合語形成の共通性を新概念の導入という観点から説明する。5 節では、和語一形態素語を

基に、概念的複雑性という観点からこれらの護の特長を見る。7 節では、Harley (2008) の研究を基に、英語においても語種と形態的複雑性が関与する現象があることを示す。

2. Nishiyama (1999) の一般化について

Nishiyama (1999: 204) は、日本語の形容動詞について、以下のような一般化を提唱している。

(5) Generalization for NAs and CAs

NAs are loan words or polymorphemic, while CAs are native and monomorphemic.

ここで、NA は Nominal Adjective、CA は Canonical Adjective の略であり、前者は形容動詞、後者は形容詞を指す。Nishiyama (1999) は、形容動詞になり得るものとして「便利、大事、元気、変、簡単、残念、上手（じょうず）、大変、有名」および「リアル、リッチ」を挙げ、それらがすべて (5) の一般化を満たすとしている。一方、「静か、健やか、密か、確か、遙か、爽やか」などの和語の形容動詞については、「ー（や）か」が接尾辞であるとし、したがって、和語形容動詞は二形態素（bimorphemic）であるため、(5) の一般化の反例にはならないとしている。

Nishiyama (1999) が扱っているのは形容動詞（ナ形容詞）であるが、形容動詞になり得るものに関する条件は、「～する」「～中」「～済み」に前接するものに関する条件と同一である。しかし、Nishiyama (1999) は、形容動詞の形成においてなぜ借用語（loan words）と複形態素性（polymorphemic）という 2 つの条件が関わるのかについては述べていない。本稿では、その理由について考察するが、これらの条件が日本語の複数の現象に関わっているという点は再確認しておきたい。

3. コーパスにおけるデータの観察

本節では、「～する」「～中」「～済み」が前接要素としてどのようなものを取るかを実際のデータから確認する。データは『日本語書き言葉均衡コーパス』

（以下、BCCWJ と呼ぶ）を使用する。検索にはコーパス検索アプリケーション「中納言」を用いた。キーとして〈名詞 - 普通名詞 - サ変可能〉および〈名詞 - 普通名詞 - サ変形状詞可能〉を、後方生起条件として「～する」「～中」「～済み」を語彙素として指定して検索した。ヒットした用例数は、「～する」が 1,585,919 件、「～中」が 19,413 件、「～済み」が 2,456 件であった。ダウンロード可能な上限である 100,000 件を超えた「～する」の場合には、ダウンロードできた用例のみを考察対象とした。また、それぞれの用例について前接要素の異なり語数を見ると、「～する」が 5,376 語、「～中」が 1,517 語、「～済み」が 382 語であった。

3.1.「～する」について

まず、「～する」に関するデータの全体像を見ていく（以下の数値は、いずれも異なり語数）。品詞としては、前接する要素のうち、〈名詞 - 普通名詞 - サ変可能〉は 5,323、〈名詞 - 普通名詞 - サ変形状詞可能〉は 53 だった。語種別に見た場合、漢語が 4,796 で最も多く、次いで和語 294、外来語 246、混種語 38、記号 2 となった [2)]。前節語を構成する形態素の数としては、二形態素が最も多く 5,109、次いで一形態素が 192、形態素数不明・その他 [3)] が 72、三形態素が 3 となった。語種と形態素数をクロス集計すると以下のようになる。

表 1 「～する」に前接する要素の語種と形態素数

	一形態素	二形態素	三形態素	不明・その他
和語	19	267	1	7
漢語	0	4792	2	2
外来語	173	10	0	63
混種語	0	37	0	1
記号	0	2	0	0

それぞれの分類について用例数の多かったものを挙げておく。

(6) a. 一形態素の和語

びっくりする、値する、恋する、旅する、噂する、たむろする、物する、幸いする

b. 二形態素の和語

出入りする、行き来する、日焼けする、長生きする、仕事する、先取りする

c. 三形態素の和語

店じまいする

(7) a. 二形態素の漢語

存在する、説明する、利用する、発見する、理解する、紹介する、結婚する

b. 三形態素の漢語

離発着する、離着陸する

(8) a. 一形態素の外来語

スタートする、コントロールする、チェックする、アップする

b. 二形態素の外来語

バックアップする、シャットアウトする、ピックアップする

表 1 において、一見して不自然に思われるのは、漢語の一形態素要素が「～する」と共起する用例が存在しないことである。実際には、「楽する」、「得する」のような一形態素漢語と「～する」が共起する例は存在する。BCCWJ で「楽する」、「得する」を検索してみると、前者には 123 件、後者には 178 件の用例が見つかる。しかしながら「楽」と「得」という要素は〈サ変可能〉ではなく、それぞれ〈名詞 - 普通名詞 - 形状詞可能〉、〈名詞 - 普通名詞 - 一般〉という品詞に分類されている。また、「わくわくする」「ごろごろする」のようなオノマトペ要素と「～する」との共起についても、検索した用例には含まれていないものがほとんどである（「びっくり」は〈名詞 - 普通名詞 - サ変可能〉である）。これもまた、「わくわく」「ごろごろ」のような要素に〈サ変〉という品詞属性が与えられていないためである。

このような問題点はあるものの、全体的には以下のような傾向が見て取れる。

(9) a.「～する」に前接する要素のほとんどは二形態素以上の要素である。

b.「～する」に前接する要素の大多数を漢語が占める。

c. 外来語および少数の和語だけは一形態素であっても「～する」に前接する。

3.2.「～中」について

次に、「～中」のデータについて見ていく（以下の数値は、いずれも異なり語数）。品詞としては、前接する要素のうち、〈名詞 - 普通名詞 - サ変可能〉は 1,510、〈名詞 - 普通名詞 - サ変形状詞可能〉は 6 だった。語種別に見た場合、漢語が 1,351 で最も多く、次いで外来語 109、和語 50、混種語 7 となった。前節語を構成する形態素の数としては、二形態素が最も多く 1,398、次いで一形態素が 71、形態素数不明・その他[4] が 45、三形態素が 3 となった。語種と形態素数をクロス集計すると以下のようになる。

表 2 「～中」に前接する要素の語種と形態素数

	一形態素	二形態素	三形態素	不明・その他
和語	2	43	0	5
漢語	0	1347	3	1
外来語	66	0	0	43
混種語	0	7	0	0
記号	0	0	0	0

それぞれの分類で用例数が多かったものは以下のとおりである。

(10) a. 一形態素の和語

話し中、旅中

b. 二形態素の和語

仕事中、子育て中、受け付け中、試合中、手続き中、昼寝中、家出中

(11) a. 二形態素の漢語

妊娠中、戦争中、検討中、入院中、発売中、進行中、授業中、募集中

b. 三形態素の漢語

送受信中、登下校中、離着陸中

(12) 一形態素の外来語

ダイエット中、プレー中、デート中、テスト中、ドライブ中

「～中」についても、機械的データ抽出に起因する問題がいくつか存在するものの、全般に「～する」と同様の分布を示すと考えることができるだろう。

3.3.「～済み」について

次に、「～済み」のデータについて見ていく（以下の数値は、いずれも異なり語数）。品詞としては、前接する要素のうち、〈名詞 - 普通名詞 - サ変可能〉は 2,456 で、それ以外の品詞は見られなかった。語種別に見た場合、漢語が 341 で最も多く、次いで外来語 26、和語 14、混種語 1 となった。前節語を構成する形態素の数としては、二形態素が最も多く 355、次いで一形態素が 15、形態素数不明・その他[5] が 12 となった。語種と形態素数をクロス集計すると以下のようになる。

表 3 「～済み」に前接する要素の語種と形態素数

	一形態素	二形態素	三形態素	不明・その他
和語	0	13	0	1
漢語	0	341	0	0
外来語	14	0	0	12
混種語	0	1	0	0
記号	0	0	0	0

それぞれの分類で用例数が多かったものは以下のとおりである。

(13) 二形態素の和語

受け付け済み、打ち合わせ済み、手続き済み、根回し済み、砂出し済み

(14) 二形態素の漢語

使用済み、発行済み、解決済み、削除済み、確認済み、調整済み、経験済み

(15) 一形態素の外来語

アップ済み、セット済み、テスト済み、ゲット済み、コピー済み

(16) 二形態素の混種語

手配済み

やはり、「～済み」についても、「～する」「～中」と同様の分布が見られることがわかる。

3.4. 3節のまとめ

「～する」「～中」「～済み」の前接要素に関するコーパスデータから、これらはすべて同じ傾向を示すことが分かった。前出の表 1、表 2、表 3 を同一の表にまとめたものが、以下の表 4 である [6)]。

表 4 「～する」「～中」「～済み」に前接する要素の語種と形態素数

	一形態素			二形態素			三形態素			不明・その他		
	する	中	済	する	中	済	する	中	済	する	中	済
和語	0.4	0.1	0.0	5.0	2.8	3.4	0.0	0.0	0.0	0.1	0.3	0.3
漢語	0.0	0.0	0.0	89.1	88.8	89.3	0.0	0.2	0.0	0.0	0.1	0.0
外来語	3.2	4.4	3.7	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2	2.8	3.1
混種語	0.0	0.0	0.0	0.7	0.5	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
記号	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

（数値は小数点第 2 位を四捨五入）

いくつかの点で違いがあるものの、全般的にはこれら 3 つの形式に前接する要素には以下のような傾向が見られると言ってよい。

(17) a.「～する」「～中」「～済み」に前接する要素のほとんどは二形態素以上の要素である。

b.「～する」「～中」「～済み」に前接する要素の大多数を漢語が占める。

c. 外来語および少数の和語だけは一形態素であっても「～する」「～中」「～済み」に前接する。

したがって、いくつかの例外があるものの、1 節で述べた条件は記述的に妥当であると考えることができる。次節では、なぜこのような条件があるのかについて、借用というプロセスが本来どのようなものであるかという観点から考察する。

4. 新概念の導入という観点から見た借用語と複合語

今井（2013）では、複合語形成はある言語における新しい概念の名づけの手段であり、外来の概念を導入する際の手段の一つとして機能すると述べた（今井 2013: 71）。

(18)

【外国語】		【日本語】
意味：概念	→	新しい概念
｜		｜
形式：形式	→	〈原語に近い形式〉＝漢語、外来語

(19)

【外国語】		【日本語】
意味：概念	→	新しい概念
｜		｜
形式：形式	→	〈翻訳された形式〉＝複合語

すなわち、「借用語」と「複形態素」には共通の基盤があり、いくつかの形態統語的現象においてそれらが同等に扱われることに自然な根拠が与えられる。この見方に基づけば、形容詞によって表しうる概念を新たに導入する際の形態的方法（形容動詞化）が、動詞によって表しうる概念を新たに導入する際の形態的方

法（動詞化）と同じ条件に従うことも自然に説明できる[7)]。このように考えると、「～する」「～中」「～済み」の前接要素にかかる制約（および、形容動詞の前接要素にかかる制約）は以下のように規定できる。

(20)「～する」「～中」「～済み」（および「～な」）の前接要素は、新規に導入されたと見なされる概念を表すものでなければならない。

このように規定すれば、Nishiyama (1999) の一般化のように選言の形をとらず、より簡潔な規定が可能になる。

しかし、この規定について少なくとも2つの問題が存在する。まず、前接要素のうち一形態素であるものはほとんどが外来語に集中しており、漢語の一形態素語は存在しないという問題である。一形態素の漢語は当然新規に導入された概念であり、その点で前接要素として含まれていてもよいはずであるが、検索したデータ中には存在しなかった。この空白は、一つはコーパスの形態素解析上の問題である。実際には、漢語一形態素に「～する」が後接する形式は日本語に存在する。例えば、「愛する、害する、反する、察する、適する」などである。しかし、これらはコーパスにおいて全体として一形態素として扱われているため、検索結果に含まれていなかったのである。しかし、もし、これらの動詞を「～する」の前接要素として捉えたとしても、Nishiyama (1999) の一般化 (5) にも本稿での条件 (20) にも合致しており、反例とはならない（ただし、本研究では、これらは漢語一形態素に「～する」が後接したものとは見なさない。詳しくは注 8）を参照されたい）[9)]。

もう一つの問題は、何を「新規に導入された」と見なすのかが明確でないという点である。そもそも、漢語は借用語であるという点で新規に導入された語であるものの、その多くは、上代から近代にかけて取り入れられたものであり[10)]、現代日本語の話者にとって「新規」と見なすのは難しい。したがって、「新規」という場合、それがどのような意味で「新規」であるかが問題になる。この点については、「～する」の用法の歴史的な変遷を概観すること解決が可能であると考える。

『角川古語大辞典』によると、動詞「為（す）」は「行為をする意や現象が起る意など、動作・作用を表す広範囲の意味に用いられる。動作性・作用性を表す名詞に付いて、「あるじす」「乞食す」など複合動詞を作り、また、動詞連用形に付いた「欲りす」「尽きす」「恋ひす」や、形容詞連用形に付いた「よくす」「まつたうす」などの複合動詞を作る。」とされている。ここで注目したいのは、1）動作・作用を表す広範囲の意味を持つ、2）前接要素とともに複合動詞を形成する、という 2 つの点である。すなわち、動詞「為（す）」の本来的な機能は、何らかの要素についてそれを動詞化するということにあったと考えられる。

この場合、前接要素には特に制限はなかったものと思われる。実際、現代語ではすでに使用されない「あるじす(る)」「乞食す(る)」「欲りす(る)」「尽きす（る)」といった形式も存在していたことが分かる。『日本語歴史コーパス』[11] においても、「詣です」「禊す」のような例は鎌倉期までに集中しており、現代語とは異なり一形態素和語に前接する用法が多くあったことが窺われる。

形態変化を持たない中国語から、形態変化を持つ日本語への語彙の導入に当たっては、このような「す」の特性が利用されたと考えられる。以下の表は、「～す（る)」に前接する要素がどのように時代ごとに変遷したかを『日本語歴史コーパス』のデータから示したものである [12]。奈良期には全体の用例の 7.8% しかなかった漢語形態素が平安期から増え始め、鎌倉期以降はほとんどの用例を占めるようになる。

表 5 「～する」に前接する要素の歴史的変遷

	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	明治	大正	昭和
和語 一形態素	29.4	11.9	1.4	0.8	5.2	0.7	1.5	6.6
和語 二形態素	62.7	10.3	4.8	6.6	9.7	0.9	1.9	4.2
漢語 一形態素	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0
漢語 二形態素	7.8	76.5	93.4	89.0	83.5	98.1	96.2	88.2

（数値は百分率）

すなわち、当初は前接要素に形態的複雑さにかかわらず和語が生起した「～す（る）」が、その後の漢語の移入に伴い、漢語を動詞化する機能を主とするようになったと考えられる。

漢語の中には一形態素の動詞も存在したと思われるが、前述のように、それらは次第に活用を変化させ、「和語化」して一形態素の語となっていった。したがって、「～す（る）」に前接する要素はほとんどが二形態素ということになった。その後、西洋からの新たな概念の導入に当たっては、(20) の「新規に導入された概念」という条件に従って、「～する」を使った動詞語彙の導入が行われたと考えられる。その結果、「～する」の前接要素として、二形態素の漢語と一形態素の外来語が多く見られるという分布が成立したと考えることができる。

5. 概念的複雑性から見た和語複合語

4 節では、借用という観点から、「～する」の前接要素の分布の偏りについて歴史的な過程の帰結として説明を試みた。それによって、少なくとも漢語と外来語に関しては簡潔な記述が可能になる。しかし、和語についてはどうだろうか。4 節で述べたように、和語の複合語は新規に導入された概念に対する名づけという機能を持っているため、ここでもやはり (20) の条件によって説明が可能であると思われる。ただし、「～する」に前接する要素がすべて複合語であるわけではない。BCCWJ のデータには、「値する、恋する、旅する、噂する、たむろする、幸いする、心する、おんぶする、話する、唾する、あくびする、うがいする」といった一形態素の前接要素も見られる。それ以外にも、「びっくりする、どっきりする、ポイする」といった一形態素のオノマトペが前接する場合もある。

『日本語歴史コーパス』で確認すると、「心する」「恋する」「物する」は奈良期、ないし平安期から使われており、古形が慣用的に継続して使われている場合として例外的に扱うことができると考えられる。また、オノマトペは、これまで扱ってきた和語・漢語・外来語という語種とはまた異なる層であり、特殊なものとして別扱いにする必要があるかもしれない[13)]。

しかし、以下のような例は、(20) の条件に対する反例となり得る。

(21) a. お読みする、お送りする、お待ちする
b. 一回りする、一休みする、一眠りする
c. プロ入りする、ごみ扱いする、箱買いする

(21) の特徴は、これらが生産性が高い構文になっている点である。(21)a はいわゆる謙譲語の構文であり、有情物を主体に取る多くの動詞に適用できる。(21)b も、「一煮する、一混ぜする、一すすりする、一にらみする」といった多くの動詞で生産的に使われる。(21)c は「～する」の前接要素が和語一形態素の動詞の連用形で、さらにその動詞の前に名詞が生起するが、その名詞も様々な要素であり得る（「会場入り、代表入り、韓国入り」「子ども扱い、ばか扱い、犯人扱い」「ケース買い、セット買い、カートン買い」）。(20) の条件が当てはまるとすると、これらはすべて新しい概念の導入ということになるが、これらを 4 節で述べたような歴史的な過程と同一視することはできないように思われる。(21) のような生産的なプロセスでなくとも、「～する」に前接する和語が多くの場合二形態素であることは明白であり、その点で「～する」の和語の前接要素が二形態素という形式的な特徴を持つことは一般に成り立つと言える。

このような形態的特徴は、その形式が表す概念という観点から捉え直すことができる。今井（2018）では、和語単純動詞（「読む、書く」など）、和語複合動詞（「凍え死ぬ、流れ出る」など）、和語複合動詞連用形（「行き来（する）」「出入り（する）」など）の 3 つの形式について、それらが表しうる事態の概念的な複雑さが異なることを主張し、漢語二形態素動詞は和語複合動詞連用形に対応することを示した。この分析に基づけば、「～する」に前接する要素は何らかの点で複雑な概念を持つと言える。このことは、(21) を含めて本稿で考察した和語複合動詞の多くに当てはまると言える。

6. 新概念・複雑概念としての借用語

これまでの議論をまとめると以下のようになる。

(22)「～する」の前接要素について

a. 漢語、外来語は新概念導入の条件 (20) で説明できる。

b. 二形態素和語は概念的複雑性によって説明できる。

すなわち、「～する」の前接要素における分布の偏りは前接要素の概念的な特徴によって説明が可能であるということを意味している。このことは、4 節で述べた借用のあり方から自然に導かれる。通常、何らかの新しい概念が導入されるのは、その概念を端的に表現する語がその言語に存在しないからである。もしすでに存在するのであれば、新たな語を導入する必要はない。したがって、新たに導入される概念は、必然的にその言語において複雑な概念としてしか表現できないはずである。(22)a, b はその点で密接に関連しており、新たな動詞を形成する手段として「～する」の機能を自然に説明できるものと言える。

しかし、その一方で、「～する」の前接要素の概念的特徴が、形態的複雑性という形式的特徴と全く無関係に成り立つわけではないということも指摘しておきたい。「～する」の前接要素が「～中」や「～済み」とほぼ同様の特徴を持つことは 3 節で指摘したが、一形態素漢語動詞は「～する」のみに生起し、「～中」や「～済み」には生起しない。

(23) a. 激うまのホルモン<u>熱し中</u>（cf. * 熱中）)

b. <u>熱し済み</u>の中華鍋にサラダ油（大さじ 1 と 2 分の 1）を入れ（cf. * 熱済み）[15)]

c.「BLACK CAT EDITION」は残念ながら定員に<u>達し済み</u>（cf. * 達済み）[16)]

これは、注 8 で述べたように、これらの動詞が「和語化」しているためとも考えられるが、三宅（2010）で「一般的な“～スル”型動詞としてのふるまいを示す」とされた「得する、損する、楽する」についても、「* 得｛中／済み｝」「* 損｛中／済み｝」「* 楽｛中／済み｝」は（意味的に整合しないためという可能性はあるものの）容認されないように思われる。この点については、概念的な問題ではなく、形式的な問題と考えざるを得ない。

3 節で見たように、「～する」「～中」「～済み」の前接要素は現代語において

はほとんどが二字漢語である。これらを構文として考えた場合、特に漢語については前接要素が二形態素であるという形式的制約をこれらの構文が歴史的過程において獲得してきたと考えることができる。これらの要素が「～する」に後接して使われることが多いことを考えると、使用頻度が多い〈漢語一形態素＋する〉においては例外的用法が残り、使用頻度が少ない〈漢語一形態素＋｛中／済み｝〉においては形式的制約が適用されるようになった可能性がある。

7. 英語における語種と形態的複雑性

これまでは、日本語のいくつかの現象において語種と形態的複雑性が関与すること、また、その 2 つの条件の間に関連性がある理由について考察してきた。本節では、日本語以外の言語である英語についても同様の条件が成り立つ可能性があることを見る。

Harley (2008) は、動詞の統語構造を v° と V の二部構造（bipartite structure）とする主張を理論的、経験的側面から検証している。いくつかの経験的な証拠が取り上げられているが、最も主要なトピックは、与格移動（dative shift）と言われる構文である [17)]。

(24) a. Mary gave the book to John.
b. Mary gave John the book.（Harley 2008: 47）

与格移動にはいくつかの制約があることが知られているが、その中に、Latinate verb は与格移動しないというものがある。Latinate verb とは、主にノルマン人の征服を契機に大量に借用されたフランス語からの語彙に基づく動詞のことである [18)]。一方、英語本来の語彙については Anglo-Saxon verb と呼ばれる。

(25) a. Susie gave Oxfam some canned food.
a’. Susie gave some canned food to Oxfam.
b. *Susie donated Oxfam some canned food.
b’. Susie donated some canned food to Oxfam.（Harley 2008: 68）

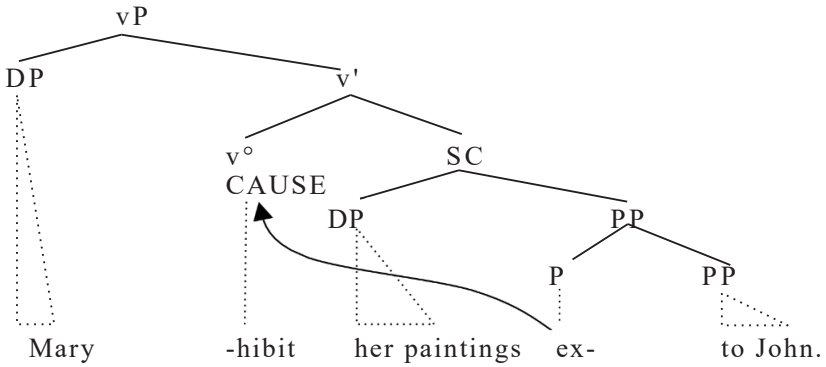
(25) a, a’ では、*give* という Anglo-Saxon verb が使われているため与格移動が可能であるが、(25) b, b’ の *donate* は Latinate verb であるため与格移動が許されない。

このような語種による制約について、Harley (2008) は以下のように述べている。

(26) I argue that it is because the Latinate verbs are bimorphemic. Each of the two morphemse [sic] in a verb like *exhibit* is associated with a particular part of the bipartite verb structure. In particular, these verbs, historically composed of a prepositional particle prefixed to an independent verb root, are in fact *synchronically* so composed, in the minds of English speakers. That is, Latinate verbs are fundamentally verb-particle constructions, where a) the particle mandatorily incorporates into the v° and b) the whole is interpreted idiomatically, as so many verb-particle constructions are. (Harley 2008: 72-73)

すなわち、Latinate verb は二形態素（bimorphemic）であり、そのそれぞれの形態素が構造的に異なる位置に基底生成されることで、与格移動に対する制約が生じると考えるのである。

(27)



Harley (2008) は、与格移動という統語現象に対して理論的な説明を与えるという文脈において借用語の動詞（Latinate verb）を二形態素として扱うという仮定を立てているが、結果的に、本稿で述べてきた条件と類似した条件になっているのは興味深い。

もちろん、与格移動という現象は日本語には存在しないため、Harley (2008) の議論が日本語でも成り立つかどうかを直接的な形で確かめることはできない。しかし、Harley (2008) が挙げている Latinate verb のもう一つの特徴は、日本語に当てはめて議論するできる可能性がある。Harley (2008) は、Latinate verb は verb-paticle construction[19] に生起しないと述べ、以下のような例を挙げている。

(25) a. write it up　　*compose it up/*arrange it up
　　b. eat it up　　*consume it up
　　c. finish it up　　*complete it up
　　d. throw it up　　*discard it up
　　e. lie down　　*recline down
　　f. hand it out　　*distribute it out
　　g. show it off　　*exhibit it off/*reveal it off
　　h. fire it up　　*ignite it up　　（Harley 2008: 67）

このような特徴は、影山（1993）で述べられている、語彙的複合動詞に漢語が生起しないという制約を想起させる。

(25) a. * 壁にポスターを接着し付ける（cf. 貼り付ける）
　　b. * 柵をジャンプし越す（cf. 跳び越す）
　　c. * 吸引し取る（cf. 吸い取る）
　　d. * 沸騰し立つ（cf. 沸き立つ）　　（影山 1993: 88）

影山（1993）は、このような特徴を語彙部門における派生と統語部門における派生という派生のレベルの違いによって説明しているが、Harley (2008) のように形

態的な複雑性（本稿の立場では概念的な複雑性）によって説明することもできるかもしれない。本稿ではこれ以上の議論はしないが、日本語と英語の共通性を示唆する興味深い現象と言える。

8. おわりに

本稿では、「～する」「～中」「～済み」に前接する要素について、語種と形態的複雑性という 2 つの条件を出発点として分析を進めてきた。最終的に、語種の問題は概念の新規性、形態的複雑性の問題は概念の複雑性を示すと想定することで、これらの要素にかかる制約を自然に説明することができると主張した。この説明は、借用と複合語形成が同等のプロセスであるという見方とも整合的である（cf. ten Hacken and Panocová 2017）。

その一方で、6 節で述べたように、現代日本語について見れば、単に概念上の要因だけで説明しきれない現象も残されている。また、本稿で収集した実例の中には様々な用法の「～する」が含まれているため、それらを分類整理することでこの現象のより詳細な特徴を明らかにする必要がある。

参考文献

今井忍（1998）「「句の包摂」に関する意味論的考察」『日本語・日本文化』第 24 号.

今井忍（2018）「動詞の語種とそれが生起する構文－意味論的分析」『グローバル化時代における日本語教育と日本研究』Nhà Xuất bản Đại học Quốc gia Hà Nội.

影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房.

小林英樹（2004）『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房.

阪倉篤義（1978）『日本語の語源』講談社現代新書.

寺澤芳雄編（2002）『英語学要語辞典』研究社.

前田直子（2020）「7 文法①－日本語の品詞と動詞活用－」滝浦真人編著『日本語学入門』放送大学教育振興会.

三宅知宏（2010）「“一字漢語スル”型動詞をめぐって」大島弘子・中島晶子・ブラン・ラウル編『漢語の言語学』くろしお出版.

Harley, H. (2008) “The bipartite structure of verbs cross-linguistically, or, Why Mary can’t exhibit John her paintings.” In Thaïs Cristófaro Silva and Heliana Mello (eds.) *Conferências do V Congresso Internacional da Associação Brasileira de Lingüística*: 45-84.

Itô, J. and A. Mester (1995) “Japanese Phonology.” In J. Goldsmith (ed.) *The Handbook of Phonological Theory*. Blackwell.

Moehle, A. (2010) “Semantic Extensions of English Phrasal Verbs and Japanese Lexical Compound Verbs: From Motion to Change-of-State.” 大阪大学大学院言語文化研究科修士論文.

Nishiyama, K. (1999) “Adjectives and the copulas in Japanese.” *Journal of East Asian Linguistics* 8(3): 183-222.

ten Hacken, P. and R. Panocová (2017) “The Interaction between Borrowing and Word Formation.” *SLE 2017 Book of Abstracts*. Societas Linguistica Europaea.

付記：本研究は JSPS 科研費 18K00575 の助成を受けたものである。

注

1）本稿では、漢語については漢字一字をいわゆる「字音形態素」として一形態素と見なす。

2）記号の内訳は「PR する」（用例数 5 件）と「KO する」（用例数 1 件）である。

3）形態素数が不明のものとしては、「真似する」「（ご）馳走する」「うんぬんする」「インプットする」などがある。「真似」の語源について、『日本国語大辞典〈第二版〉』は「マネブの語根〔大言海〕」「まこと（真）を似せる意〔日本釈名〕」といった語源説を挙げているが、前者を採れば一形態素、後者を採れば二形態素ということになり、決定が不可能であるため、形態素数を不明とした。また、「インプットする」の場合、語源的には「イン（in）」と「プット（put）」から成る二形態素の語と考えられるが、日本語母語話者がそのような認識を持つかどうかが明確でないため、形態素数不明とした。また、誤植と思われる用例、形態素解析の誤りと思われる用例についても不明・その他として分類している。

4）形態素数が不明のものとしては、ほとんどが外来語である。注 2 で述べた「インプット」と同様、語源的には複形態素であっても、日本語母語話者の認識が不明なものが多くを占める（「ジョギング」「インタビュー」「テイクアウト」など）。また、「デモ」「リハビリ」などの縮約された形式についても不明とした。外来語以外では、「あくび」「おんぶ」がある。これらについても、注 2 における「真似」と同様、語源について諸説あること、また、日本語母語話者の認識が不明であることから形態素数は不明とした。

5）形態素数が不明のものは、すべて外来語である。注 3 を参照されたい。また、和語の不明・その他 1 例は誤記と思われる用例である。

6）表 4 では、各用例の頻度差をならすために、各用例の総数で除した百分率で数値を表示

している。

7）前田（2020）は、なぜ日本語には形容詞が二種類（形容詞と形容動詞）あるのかという疑問に対し、「日本語にもともと存在していた形容詞はイ形容詞であって、新たに漢語や外来語を形容詞として受け入れた際、形容動詞（ナ形容詞）として受容してきたと解釈できる。形容動詞（ナ形容詞）という第二の形容詞は、日本語の中で、新しい形容詞を生み出す装置として機能していることがわかる。」と述べている。

8）三宅（2010）では、主にアクセントと活用の観点から、これらの一形態素漢語動詞がまとまった一つの語幹であることを論じているが、本研究も同様の立場をとる。三宅（2010）が対象外とした「論じる、信じる、感じる」なども含めて考えれば、本来、サ行変格活用であったものが、五段活用、ないし、上一段活用へと変化してきているのは明らかであり、いわば「和語化」しているものと考えられる。また、「～中」「～済み」との共起においても、漢字一字での前接の例は、実例としては存在しないことからも、これらは和語化していると見るのが妥当である（「熱し済み」「熱し中」「達し済み」のような例はインターネット検索では何件か見つかる）。

9）形容動詞についても、「雑な、楽な、得な、損な、変な、急な、妙な、酷な、密な」など漢語一形態素のものが存在するが、これらについても (15) と (22) の反例にはならない。なお、漢語一形態素の動詞とは異なり、形容詞への「和語化」はほとんど起こっていないようである（ただし、『日本国語大辞典』には方言として「雑(ざつ)い、楽(らく)い」が立項されている）。

10）主に明治期以降に日本で作られた和製漢語も新規に導入された概念という点では同列に扱うことができる。

11）https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/

12）『日本語歴史コーパス』のコアのみを検索対象とした。キーとして〈名詞 - 普通名詞 - サ変可能〉および〈名詞 - 普通名詞 - サ変形状詞可能〉を、後方生起条件として「～為る」を語彙素として指定した。ヒットした用例数は 18,956 件で、異なり語数は 4088 であった。表 5 の百分率は、時代ごとの用例の総数を分母とし、各カテゴリーの用例数を分子として算出している。外来語、混種語、形態素数不明の用例については省略した。

13）オノマトペは、音韻論における語種分類においても独立したカテゴリーをなしている。詳しくは、Itô and Mester (1995) を参照されたい。

14）https://djob.docomo.ne.jp/jobs/50853409（最終確認 2024 年 1 月 1 日）

15）https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1425504339（最終確認 2024 年 1 月 1 日）

16）https://gigazine.net/news/20150122-neeo/（最終確認 2024 年 1 月 1 日）

17）この構文は、dative shift 以外に dative alternation、dative movement とも呼ばれる。本稿では寺澤編（2002）に倣い dative shift を「与格移動」と呼ぶことにする。

18）Harley (2008) は、Latinate verb であるかどうかは、必ずしも語源だけでは決定されないと述べている。フランス語起源の借用語でも Germanic verb としてのふるまいを示すものもあるとしている。

19）verb-particle construction は、句動詞（phrasal verb）とも呼ばれ、動詞と不変化詞（up, out, down, over, など）の組合せからなる形式のことである。詳しくは Moehle（2010）を参照されたい。

Lexical Strata and Morphological Complexity in Verbal Predicates: Focusing on Words that Precede *-suru*, *-tyuu* and *-zumi*

IMAI Shinobu

This paper explains why the two characteristics of words which precede *-suru* (する) “do’’, *-tyuu* (中) “during” and *-zumi* (済み) “done” are 1) borrowed words and 2) morphologically complex, based on the characteristics of the process of borrowing. Based on data collected from the corpus, we showed that conditions 1) and 2) are indeed valid. Next, we argued that Sino-Japanese words and foreign words have in common that they are newly introduced concepts, and that native compound words are complex concepts. In borrowing, being a new concept and being a complex concept are inevitably linked, and from this we showed that characteristics such as 1) and 2) can be observed. Furthermore, I reviewed studies showing that the verb of a loanword consists of two morphemes not only in Japanese but also in English, and suggested that the conditions 1) and 2) may be true cross-linguistically.